美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

11

2020 November/December

TAKE FREE

NO.62

特集

古代布・羽越しな布

庄内憧憬

佐々木亜希子

活動写真弁士

Cradle 11

美しくなつかしい、日本をのせて。

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

2020 November/December

令和2年11月1日発行（偶月奇数月発行）第11巻2号（通巻62号）

発行／Cradle事務局　山形県鶴岡市山王町8-15［株式会社 出羽庄内地域デザイン］電話0235(64)0888

制作／Cradle編集部　山形県酒田市浜田2-69-3［コマツ・コーポレーション］電話0234(41)0012

FIDEA GROUP

酒田市／数河の池

湖畔を照らす 山麓の秋気

荘内銀行

幼い頃の思い出と赤川の土手

佐々木 亜希子

鬼ごっこ、凧揚げ、夜はみんなで花火。
従妹たちとはしゃぎながら寝たいくつもの夏は、
今も宝物のように輝いている。

私は酒田市に生まれた。鳥海山を望む美しい田園風景がいつも目の前にあり、小中学校の行き帰りは、四季折々に移ろう田んぼを見ながら物語や歌を作る大好きな時間だった。同じくらい愛着があるのが、鶴岡の母の実家で遊んだ日々である。母の実家は、日出町。歩いて5分ほどのところに赤川があり、その土手は格好の遊び場だった。

子どもの頃は、ほぼ月に一度、日出町に行っていた。母は6人兄妹だったため従妹も多く、夏休みは埼玉や神奈川に嫁いだ伯母たちが子ども連れで帰省し、1週間も滞在する。祖父母の家は、母が育った家のままで古いし物は多い。その2階の部屋に蚊帳を吊り、従妹たちとはしゃぎながら寝たいくつもの夏は、今も宝物のように輝いている。

たいてい、遊び場は「赤土（あかつち）」と呼んでいた近くの空き地か赤川の土手。いつも貸し切り状態で、野球や足で蹴るベースボールをする。鬼ごっこ、凧揚げ、夜はみんなで花火。とにかく楽しかった。

冬は雪の積もった土手で橇（そり）遊び。これは普通だが、面白かったのは夏の草橇。「お母さんだちが子どもの頃は、筵（むしろ）どが米の麻袋なんかで滑ったもんだ」というので、みんなで米袋を橇がわりに土手の上から滑降。「いで！ いで！ いで～！」。草が生えているとはいえ、ごつごつした石にあたってお尻が痛い！ しかも、バランスが取りづらい！ 途中で転倒し、大笑いしながら再挑戦！ 母や伯母たちも、一緒に童心に還って夢中で滑った。

ある時は、土手下の草むらで追いかけっこしているうちに、川の近くのネコヤナギの木に夢中になった。白くふさふさの花、なぜか木のあちらこちらに黒いベットリしたものが付いている。触って、手折って「なんだこれ～」。手についたらもう取れない。こすった顔にも服にも黒いものがべっとり。コールタールだった。帰宅した子どもたちは「何付けできたな！」おじいちゃんに大目玉。

その祖父はよく、遊びに夢中で帰ってこない私たちを自転車で迎えに来てくれた。桜の季節になると、桜満開の赤川の土手を自転車で走る祖父の姿を思い出す。私たち姉弟の卓球大会や運動会には、自転車で酒田まで応援に来てくれた。

祖父が先に亡くなり祖母が一人になると、母は酒田から毎日仕事帰りに祖母のところへ駆けつけた。

そういえば、私が小学校3年の時に学校の帰り道で初めて作った短い歌は、母の故郷への郷愁を歌ったものだった。歌詞に赤川も入っている。近くて遠い故郷――。

帰省し赤川の土手を通るたび、来し方を思うのである。

鶴岡市赤川土手

ささきあきこ／1972年酒田市生まれ。埼玉大学教養学部卒業。NHK山形放送局でニュースキャスターを務めた後、活動写真弁士になる。『君の名は。』『カツベン！』など活弁を活かした音声ガイドや、ナレーション、MC、芝居、講演、執筆等、多岐に渡って活動。NPO法人Bmap理事長。鳥海八幡中学校校歌作詞作曲。著書『カツベンっておもしろい！ 現代に生きるエンターテインメント「活弁」』（論創社）

特集

古代布・羽越しな布

古代縄文の時代から、日本の先人たちは山野の植物から繊維を取り、生活に用いてきました。天然素材の中でも「シナノキ」から得る糸や布は特に強靭で水に強く、実用的な用途から工芸品としての価値まで今も変わらない風合いを保ち続けています。山形県、新潟県の県境で悠久の時を紡いできた、日本三大古代布の一つ「羽越しな布」。人は自然に生かされているという実感の中で育まれ、伝えられてきたしなの布は、日本の生活文化の尊さをその手ざわりの中に宿しています。

表紙作品＝大滝ジュンコ

しな育つ郷（さと）で

庄内では天保時代の1830年頃、庄内藩士・池田玄齋の随筆『弘采録（こうさいろく）』の中に、「しな」が袋や畳のへりに使われていたという記録が残っています。生活用品としてのしな布から日本が誇る伝統工芸品へ。その背景には、鶴岡市関川がしな布と共に生きてきた時間が刻まれています。

「麻は1年、しなは10年着通せる」といわれたほど、しなやかで機能性に優れるしな布。戦前までは生活用品として多目的に使われていました。関川では家々で織ったしな布の原反を鶴岡の荒物屋を通して全国に出荷し、高い生産量を誇っていたといいます。しかし戦後の高度経済成長期の到来で、海外から流入した化学繊維に取って代わられることに。「量産できて安価な化繊に比べて、しな布は糸から布になるまで10カ月もかかる。でもしな布は我々の生活の一部だから、やめることはしなかったんですよの」そう話すのは、関川しな織協同組合の専務理事や組合長を務めた五十嵐勇喜さんです。関川の人々にとってしな布は、自然と共に生きてきた先人の知恵の賜物。誇りでもあるその生活文化を絶やすわけにはいきませんでした。やがてそこに追い風が吹きます。自然の風合いと人の手わざが生きたしな布は、工芸文化として新たな価値を持つように。「一方で作り手が減ってきていたからの。しな織を共同化できる生産拠点をつくって、観光にもつなげようと考えたな」。

強靭で耐水性に優れたしな布は、酒などの濾し袋や漁網、こもじ布団など生活に多用された。写真は繭を煮た袋と米袋（関川しな織センター所蔵）。

そうして昭和60年に関川しな織センターが開所。観光客が続々と訪れ、商品化も始まりました。「商品の加工を始めた時は、村のお母さんが30人も集まっての。ところがいつまでたってもお金にならない。1人、2人と辞めて、最後に残ったのが7人の侍だったな」。その7人とは、糸作りから織りまですべてできるお母さんたち。「無収入で布を織って、観光客に向けて実演して。その7人がセンターの最初の功労者だったんだ」。

山林が面積の約7割を占める鶴岡市温海地域。しな布や焼畑など伝統の生活文化が現存している。

そうして日々奮闘するお母さんたちのもとに昭和63年、東京の業者からワイン袋の大量注文が入ります。その出来事は喜代さんたち7人に「希望と勇気を与えてくれた」といい、地域産業としての将来を見据えて、平成元年に集落全戸加入の協同組合を組織、勇喜さんは自主生産力の強化と販路拡大に力を入れました。

そして商品化を始めて10年目の平成7年夏、「第1回古代織サミット」が関川で開かれ、さらに活気を増します。平成17年には「羽越しな布」として国の「伝統的工芸品」に指定され、古代日本の文化を守ってきた産地の人々に光が当てられました。

「しなの仕事はもともと冬の間に糸を績んで布を織り上げると春になった。だからこの辺の人たちは春に特別な思いを持ってきたんだの。1ハタ織り上げた安心感と開放感。雪で閉ざされる冬があるから、しな織は残ってきたんだと思う」。

冬の訪れはもうすぐ。雪深いしなの郷で、ひと績み、ひと織りと、また次の季節を紡いでいきます。

関川の男性たちいわく「しなの仕事はかあちゃんたちでないとできない」。根気強くおおらかで、たくましい女性たちが産地を支えてきた。

旧庄内藩主酒井家17代当主、酒井忠明氏が揮毫した、しな布ののれん（関川しな織センター所蔵）。

五十嵐 勇喜さん・喜代さん
関川しな織協同組合組合長を務めた勇喜さんと、奥様で織り手の喜代さん。勇喜さんはセンターの設立としな布の自主生産、商品開発、観光誘客、販路拡大に尽力。喜代さんは現役の指導者としてしな織の伝承に取り組む。

特集・古代布・羽越しな布

糸を績（う）む、布を織る

日本に残る古代布の多くは植物を原材料とし、樹木であれば樹皮のやわらかな内皮から繊維を取り出して糸から布へ、すべて人々の手でつくられます。縄文時代から使われてきたシナノキの繊維は20を超える工程をへて、1枚のしなやかで美しい布に仕上がります。

「しな織は、自然の木から糸を取り出す作業。（中略）自然の移り変わりと、年を経ていく人間がうまく絡み合って作業ができるので、今まで引き継いでこられたのではないでしょうか」。これは前ページの五十嵐喜代さんが書いた「私としな織」の一文です。しな布の製造工程は多くの人手（手間）を要し、産地では家事として、また、山仕事や農作業と並行した1年の仕事として続けられてきました。その工程の大半を担うのは女性たち。喜代さんのおばあさんやお母さんも朝から晩までしなの仕事をしていたといいます。それは単に収入を得るための根気のいる勤労ではなく、関川での暮らしの楽しみの一つでもあったとか。『結』といっての、男の人が冬から春先まで出稼ぎに行っている間に女性たちは家に集まってしな撚（よ）りをして、その家の糸作りを手伝うな。持ち寄ったご馳走を食べて、おしゃべりしながらの」。そうした共同・互助のコミュニケーションの場があることで集落の強いつながりが生まれ、糸作りの技法が引き継がれてきました。喜代さんも小さい頃におばあちゃんからしな績みを教わり、小学生になると友だちとの遊びの一つにしていたそう。春間近の陽気の日には、外にむしろを引いてみんなで糸を績んだのも思い出深い風景だといいます。「トンカラントンカランと関川に流れ続けて来たこの音を永遠に絶やすことのないよう。どこにもない文化遺産を残してくれた祖先に感謝」。自然と人とを結ぶしなの糸。織りなす布は日本古来の自然観を象徴するかけがえのない文化財です。

梅雨明け直後、木が十分水を吸収している間に伐採する。

しな布ができるまで

1. 皮はぎ・しなへぎ（6月中旬〜7月上旬）
樹皮をはがし、繊維部分となる靭皮（じんぴ）を取り出す。繊維の質を左右する重要な力仕事。

2. 乾燥
しな皮は水分を含んでいるので天日に干す。乾燥した場所で保管する。

3. 水つけ
4. 巻く
しな皮を家の前の池などに一昼夜ほど浸けて、煮る釜の大きさにあわせて巻いておく。

5. しな煮（7月下旬）
釜に木灰と水を入れて煮る。木灰のアルカリ性の作用で繊維がやわらかくなる。

6. へぐれたて、しなはぎ
しな煮が終わった翌日に釜から出して洗い、ほぐしながら皮の層を薄くはがしていく。

7. しなこき
6の後、川の流れで屑皮などをしごき取る。繊維が残り、やわらかな1枚のしなになる。

8. しな漬け
7の後、桶に入れて小糠に1日〜2日漬ける。

9. 洗う
桶から出して糠を川などで洗い流す。糠の作用で漂白され、しなやかになる。

10. しな干し
洗ったら、天日に干した後で、風通しのいい場所で乾燥させる。

11. しな裂き
しなが乾いたら一旦湿らせて、指先を使って裂いていく。裂いた糸は乾燥させる。この濡らして乾かしての繰り返しが糸を強くする。

12. しな績（う）み
爪で糸に裂け目を入れ、その中に別の糸を通して撚りをかけ1本の糸にする。もっとも根気のいる仕事。

13. へそかき
しな撚りを容易にするため、糸を巻く。巻いたものを「へそ」という。へその細さ、太さを見て織物の用途を決める。

14. しな撚（よ）り
へそを湿らせて糸の太さや硬さが均一になるようにさらに撚りをかける。この時使う糸車は花嫁道具の一つだった。

15. 枠移し
経糸、緯糸と分けるため糸枠に移す。

16. 整経
並幅36cmの経糸を整える。

17. ちぎり巻き・経糸巻き
整経した経糸を機織り機の心棒「ちぎり」に巻いていく。

18. 綜絖（そうこう）通し
19. 筬（おさ）通し
20. 織りつけ
機織り機の「綜絖」と「筬」に糸を通す。経糸が織り機にセットされて、いよいよ織り始め。棒に織りつけ布を取り付け、そこに経糸の端を結ぶ。

21. くだ巻き
経糸に緯糸を入れて布にするため、緯糸を管（くだ）に巻く。その管を経糸に通すのが杼（ひ）という道具。

22. 機織
織り機は昔「いざり機（ばた）」が使われていたが、現在は「高機（たかばた）」が一般的。糸を湿らせて張りを調整し、「打ち込み」の強弱を加減しながら、用途に合った布を織る。織り機と織り手が一体となって集中を要する作業。

写真提供＝五十嵐 丈

関川しな布の今

**激動する世の中で、
古代から受け継がれてきた樹皮の織物を、
関川の人たちは、どのように守り、
未来につないでいこうとしているのでしょう。
関川の今について伺いました。**

現在関川では、しな織組協同組合の組合員が各々の家でしな糸を作ってしな織センターに納め、その糸を2名が織って布にしています。しな布は帯として呉服業者へ卸したり、組合員である加工グループが商品化してセンターで販売したり、地域外の加工業者やしな布作家に販売したりして世の中へ。「平成17年に国の伝統的工芸品に認定された影響で、近年は帯の需要が一番増えています。ただ全体の売り上げは、全盛期の3分の1に落ちています」。そう話すのは、平成25年に組合長に就任した五十嵐茂久さんです。「売り上げの問題は、全国的に伝統工芸品が売れにくい時代になっているので致し方ない部分がありますが、産地としての一番の課題は、糸を作る人手が減っていることです」。

平成29年8月にリニューアルした関川しな織センターでは、しな布製品を販売しているほか、コースター作り体験などもできる（要予約）。

平成元年の発足当時、48戸あった個数は現在32戸に。40人いた糸の作り手も10人弱に減りました。組合では早い段階からこの状況を見据え、平成12年に研修生制度を設け、外部から人材を受け入れて若手後継者の育成に励んできましたが、期待通りに育成は進みませんでした。そのため昨年から研修生制度を一旦廃止し、その補助金を以前から続けている隣の木野俣集落への糸づくり講習会に充てるなど、周辺地域での人材育成に切り替えています。他にも伝統的工芸品規定にとらわれない商品づくりを考えたり、しな糸の可能性を探る研究機関に積極的に協力するなど、現状打開のための方法を模索中です。

関川しな織協同組合組合長の五十嵐茂久さん。羽越しな布振興協議会会長、全国古代織産地連絡会会長も兼任。関川しな織センター前にて。

その中で生まれたのが、シナの花を使った化粧水や石鹸の販売を通して、関川のしな文化を発信しようという新たな動きです。羽越のデザイン企業組合代表理事の冨樫繁朋さんは話します。「もともとシナの花コスメは、平成26年に鶴岡市が事務局となって発足した『しなの花活用プロジェクト研究会』で研究が進められてきたものでした。ただ、いよいよ製品づくりに入ろうという時に、事業主体になることを予定していた関川の組合が引き受けられない状況になったのです。それで担当の方が私たちNPOに相談に来ました」。NPOとは、鼠ヶ関生まれの冨樫さんと関川生まれの五十嵐丈さんが事務局を務める「自然体験温海コーディネット」のこと。温海地域の自然や文化、暮らしをテーマにした体験プログラムを提供しています。「私たちの活動の原動力は、過疎化が進む故郷の魅力を次世代につなげたいという強い思いです。しな布のことも以前から何かできればと考えていたので、プロジェクトを引き受けることにしました」と丈さん。

羽越のデザイン企業組合代表理事の冨樫繁朋さん（右）、副理事長の五十嵐丈さん。丈さんがかぶっているのはしな布のキャップ。関川集落内に自生するシナノキの前で。

2人は同志と共に製造・販売元となる羽越のデザイン企業組合の設立準備を進めながら、クラウドファンディングで資金を調達。シナの花コスメをブランド名「umu（ウム）」として、オンラインショップやしな織センターなどで販売を始めました。「今後もこれまでにないアプローチで新商品を展開し、若い層へ関川しな文化の魅力を届けたいです。そして私たちが前例となることで、地域で生業をつくり、暮らしながら文化をつなげていこうとする里守りの輪が広がることを願っています」。

umu（ウム）の商品は「シナの花水」「シナの花石鹸」「シナの花保湿（クリーム）」の3種類。しな織センターのほか、オンラインショップでも販売中。
https://www.umupj.com

写真提供＝五十嵐 丈

特集
古代布・
羽越しな布

羽越しな布を未来へ

しな布を語る時、関川と分かち難い存在として、鶴岡市大山の「しな織創芸 石田」や、山熊田と雷（いかづち）といった新潟県のしな布産地があります。羽越しな布を未来に残そうと奮闘する人たちにお話を聞きました。

鶴岡市大山の「しな織創芸石田」の創業は平成2年。石田誠さんが東京の日本民藝館で人間国宝、芹沢銈介のしな布の型絵染のれんに出合い、心動かされてから15年後のことでした。以来、誠さんは故郷のしな布文化を守っていこうと全国各地の作家に依頼し、ハイクオリティな商品を開発。平成24年に急逝するまで、五十嵐勇喜さんたち関川しな織協同組合とタッグを組みながら全国各地にしな布ファンを増やしてきました。

「しな織創芸 石田」の創業者、石田誠さん。写真は月刊「SPOON」1994.11月号スプーンインタビューより。

石田航平さんは父・誠さんの遺志を継いで、平成26年から活動を始めたしな布ディレクターです。「父はしな織が好きで、関川を盛り上げようと、全国各地に出向いてこちらに人を呼び、関川を紹介していました。ですが私が参入した頃はすでに商品が売りにくい時代となり、産地の状況も変わっていたので、私は売ることを目的に購入層が確実にいるところに行って展示販売しています。そうやってしな布を経済的に成立するものにしていかないと、若い人が継ぎたいと思えませんから」。

そんな航平さんが今準備を進めているのが、ヨーロッパへの進出です。

「しな織創芸 石田」2代目、石田航平さん。しな布文化の継続を目指し、しな布製品のヨーロッパ進出に挑戦する。

「石田」の新商品である照明器具。来年、パリで開かれる世界最大規模のインテリアとデザインの国際見本市に出展する。

来年には、パリで開催される世界最高峰のインテリア&デザイン国際見本市「メゾン・エ・オブジェ」にオリジナルの照明器具を出展し、それを機に海外市場に乗り出す予定です。「しな布製品は価格が高く、数も作れないので万人向けではありません。そこで海外の富裕層をターゲットに、という戦略もあります。さらにシナノキ自体が日本よりもヨーロッパの方が実は身近で、近縁種の菩提樹は繊維を採るために利用されてきた歴史もあるので、しな布の価値は受け入れられると思います」。

航平さんと「作戦会議」をしながらしな布の未来を見つめているのが、新潟県の山熊田に住む大滝ジュンコさんです。埼玉県出身の大滝さんは東北芸術工科大学卒業後、長崎県や富山県で現代美術作家として活動中に、山熊田のマタギ文化と出合い、人々の生命力の強さや明るさに惹きつけられます。そして山の暮らしを学ぶために山熊田に通い始め、地域おこし協力隊として平成27年に移住。しな布の存在はその過程で知りました。

「山熊田のしな布の現状は、手を出したら一生かかるというくらい課題が山盛りです。でもある日、おばあちゃんたちがしな布の行く末を案じてすごく寂しがっていたんです。それを聞いて、その思いを見て見ぬふりをしてはいけないと覚悟が決まりました」。以来、大滝さんは技術習得に励みながら、糸不足と後継者問題を解決すべく近隣集落での糸績（う）み練習会を開催。また若い世代向けのスタイリッシュな商品や、しな糸の多様な表情を生かしたアート作品などを作り、東京などで発表しています。「ただ、日本での需要は頭打ちに近いので、しな布の今後は従来とまったく違う商品を作るか、逆輸入で価値を付けるかだと考えています。ヨーロッパは付加価値をきちんと評価する土壌があるので、私もいずれパリで個展をしたいですね」。存在すること自体が奇跡でもある羽越のしな布。その未来を、それぞれのフィールドで果敢に拓こうとする人たちに、心からエールを送ります。

新潟県村上市山熊田の大滝ジュンコさん。「手に取る人がワクワクするようなしな布作品を」と制作に励んでいる。大滝さんの個人工房には、地域のおばあちゃんたちが自宅から探し出してくれた高機が2台といざり機（地機）が1台ある。

大滝さんの最新作。1枚のしな布をさまざまな方法で織ることで、多様な自然が集合する山そのものを表現。

眺海せんべ工房の眺海ごませんべ

ごまたっぷりの薄揚げせんべいは
バリッとした生地の絶妙な歯応えといい
ほんのりした甘さと塩加減といい
なんともクセになる味わい

小麦粉、ごま、砂糖、塩をよく混ぜ、ビニール袋に入れて床に置き、両足で力強く踏んでこねあげる。そして麺棒を使って両腕で薄ーくのばし、適度に切り分けたら梅干しを入れた熱々の油の中へ。ごまの風味がふわりと漂い、こんがりとした色に変われば、一度食べたらリピート必至の「眺海（ちょうかい）ごませんべ」の完成だ。

作っているのは酒田市山寺にある眺海せんべ工房の冨樫成子さんご夫婦。ごませんべは、成子さんが子どもの頃にお母さんからよく作ってもらっていたものだという。その母の味を成子さんは自身の子どもたちに作っていたが、販売のきっかけとなったのは平成6年頃、ご主人が病気となり、手足のリハビリが必要になったことだった。家の中で安全に毎日できる方法は何かと考えた末に成子さんは、足でこね、手でのばすせんべ作りをリハビリとして考案。そのかいあってご主人は順調に回復した。ついでに大量に生まれるせんべを人にあげると、とても喜ばれた。それならばと90代の義母にも試食してもらいながら歯応えなどを調整し、商品化して販売を開始。地元はもちろん、全国各地にファンを持つ眺海ごませんべの誕生となった。

現在、せんべ作りはご夫婦だけでなく、週末は息子さん夫婦も手伝っている。母の味を継ぎ、夫の健康を考えて生まれたごませんべは、今も家族の愛に包まれて作られているのだ。ちなみに、揚げ油に梅干しを入れるのは油を酸化させないためで、これもお母さんから受け継いだものだという。さすが、おばあちゃんの知恵袋。

眺海せんべ工房の主な商品は、「眺海ごませんべ」の他、大豆と白ごまがたっぷり入った「眺海豆大王せんべ」「胡桃入りパウンドケーキ」など。いずれも昔ながらの手作りのため無添加。販売先は、庄内各地の観光施設や店舗、東京銀座の山形県アンテナショップ「おいしい山形プラザ」など。

眺海せんべ工房　0234-62-2957

（取材・文　長谷川結）

庄内俳句紀行

秋水の十二滝を歩く

実りの秋は、庄内平野を黄金に染める。空一面にきらめく蜻蛉羽。水は澄み渡りその輝きを際立たせる。秋探しに十二滝へ向かった。

季語
秋水（しゅうすい）
「秋の水」、「水の秋」、「水澄む」。秋の冷やかで澄んでいる水。

十二滝（水汲み滝）

酒田市平田地区の東辺、経ヶ蔵山（標高474m）鹿島口登山道より十二滝に向かった。十二滝は、遊佐町鳥海山麓の「二ノ滝」、酒田市鳥海山東麓の「玉簾の滝」と共に、飽海（あくみ）三大名瀑の一つに数えられる。相沢川沿いの道では金平糖のような可憐なつぼみの溝蕎麦（みぞそば）、蓼の花や黄釣船草、金水引などが賑やかに迎え、露草の露が今にもあふれそうに輝いていた。

溝蕎麦の色の優しき水の音

―あべ小萩

十二滝はその名の通り、十二の滝が段々に連なって大小の滝壺をうがち、最後は二つの大きな滝（芯の滝、河原滝）となる。最上流の水汲み滝まで林道を歩くと、初紅葉を見せる木々と澄んだ流れに思わず岸辺に降り、水をすくった。小さな滝壺の脇では、段瀑を流れ落ちて生まれた風が野菊の花を揺らしていた。流れる雲の隙間から気まぐれに日が差し込み、水面をきらめかせる。川辺を囲む枝枝はいずれ見事な錦秋となるだろう。

一草の露の力をもらひけり

―祐森水香

上流を歩くと、この先に大きな滝があるとは予測できないほど、川の流れは繊細である。滝ごとのさまざまな表情を可能な限り楽しみ、林道に戻って最後の二つの滝の下流に降りた。たゆたう流れは滝を越えてきたとは思えぬほど澄み静かである。川にかかる赤い吊り橋には大雨の爪痕が残されていた。一雨ごとに山粧う紅葉が色を濃く染めていくであろう。

滝風に揺れる野菊

木には木の水には水の音の秋

―加茂一行

滝を後に、登山道を進んだ。経ヶ蔵山は古くからの修験の山で、標高のわりに所々に険しい場所や大岩や岩くぐりがある。足元には、落ちたばかりの団栗（どんぐり）や橡（とち）の実、栗が転がる。水引が足元で揺れる。山頂から望む鳥海山は雲に姿を隠していたが、木々の間には稲刈り途中の黄金色の田が日本海まで続いていた。山頂近くには経塚があり、座禅岩から山の尾根を眺める。

風よりも白き一叢（ひとむら）蕎麦の花

―水内慶太

帰り道、夕日に染まる稲穂が風に揺られ黄金の波となった。休耕田では蕎麦の花が白さを増している。まだまだ秋探しを楽しもう。どこからともなく訪れた、流れる金木犀の香に振り向いた。

写真・文＝あべ小萩（月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員）

十二滝（芯の滝、河原滝）

秋の水と落ち葉

溝蕎麦